

あんぜんの 安全

月一回ないし二回刊行予定
創刊前に数回準備号を発行します

準備 12号

あかりとあかし

05/12/22

NPO法人 安全学研究所 Organization of HOLONOMY 〒190-0012 立川市曙町 2-42-23 ア・パソライフ立川 614

Tel -Fax 042(521)2988

Email: holonomy@aa.bb-east.ne.jp

URL: <http://enjoy1.bb-east.ne.jp/~holonomy>

本格的活動の準備について

1面 <本格的活動の準備について>	14~15面 安全シリーズ「客室の安全 (キャビンセイフティ)」(寺田)
2面 <寄稿>「基礎学力」(芹沢)	16面 所在地、ご協力ご参加のお願い、 勉強会のおしらせ ほか
3~4面 「新聞から」(根来) ほか	
5~13面 <第四回:安全学遊散> (辛島司朗)	

現在、徐々に本格的な活動への準備を整えているところです。先号にもお伝えしました通り、理事3名監事1名という最小限の組織をもう少し拡大して理事が10名をこえる本格的な組織にしようとしていますが、現在までのところ理事として3人の方に、幹事として5人ほどの方に内諾をいただいております。

また、当研究所の「あかり部門」即ち実践活動についても、協力して一緒に活動したいと申し出て下さった団体もあり、何度かそちらの活動に参加して体験学習をしてもみました。このことについては、次号以降に御紹介できるかと思えます。

同時に最近では当研究所の働き手が事務の傍ら少しずつ様々な勉強会や講演会などに出席させていただいて勉強する機会を活かすことができるようになってきましたが、そうした時の懇談会などで具体的に当研究所の活動の中心目的としての安全学についての話をさせていただくなかで、安全学を待望する声も少なく具体的なボランティア活動面での社会の期待も捨てたものではないのだとだんだんに確信してきました。様々な安全問題が出来(しゅったい)するなか、明らかに政治的社会的情勢が安全とは逆の方向に向かっている今日、一層しっかりとした活動を展開してゆきたいと考えております。

会報は今号は1ヶ月近く発行が遅れてしまいましたが、研究所の体制を整えるとともに、新年に本会報の創刊号を発行するべく、努力中です。❖

ホームページ更新について

以前から何度も申し上げてはいたものの、遅れておりました「靖国神社問題」に関する文章をホームページ上に掲載いたしました。これは準備9号に掲載した「靖国祭祀と七生報國思想」のその後の拡大理解の増補文章の前半部分です。残りの後半部分もできれば一挙にできれば分割して掲載いたします。また、準備3号に予告編として一部掲載したのち、永く手許に置いたままにしておりました「嫌いなもの」についても400字詰で約180枚がほぼ出来上がっておりますので、できるだけ早くホームページに掲載する予定です。

❖

基礎学力

芹沢秀巳

各々の「独自性」とか「選択制」、「セレクト」「ニーズに合った」など選択制が、どの業界も主流になってきた。高校でも、一斉授業ではなく今や科目選択制が主流になっている。いわゆる「個性の尊重」の名の下に、「特技」を伸ばすためにと必修科目以外は授業を選択できるように選択幅の広いカリキュラムが展開されている。例えば、数学が苦手なら2年生からは数学の授業を受けなくても良いように選択すればよい。逆に、英語が得意な生徒は、1日に3時間英語の授業を受けることもできる。

しかし、ここ数年の国際的な学力テストの結果をみても学力のレベルは急速に落ちていると言わざるを得ない。少し前に、「円周率(π) = 3」とした時期があった。今また「3.14」に戻っている。(台形の面積) = (上底+下底) × (高さ) ÷ 2 という2つの三角形の和という考え方ではなく、現在は(台形の面積) = (平行四辺形の面積) + (三角形の面積) に変わっている。考え方が以前から変わってきているのだ。また、中学の数学では分数の計算はよくするが、小数の計算は少なくなっている。このため、「4分の1」 = 「0.25」とすぐ出てこないのも無理はない。高校での化学のモル計算で、最初は分数で答える生徒が多い。これは、「数学」と「理科」の考え方の違いが原因でもあるが、割算を学習する時間が少ないためかもしれない。

以前から「文系」「理系」という分け方があり一般的だが、これは理数科目が多いか少ないかの違いを指すものである。しかし、文系の中には芸術系や体育系も含まれており、他方ではまた専門学校ということで医療系の学校への進学者も、いわゆる「文系」のクラスにすることが多い。従って、医療の専門学校の希望者には、いわゆる「理系」という意識が薄い者もいる。実際、受験科目の選択制により数学や理科で受験しなくても良い。

門戸を開く点では良いかもしれない。学生募集には非常に有効な手段でもある。入学後は国家資格取得の後、高校時代のつけが回ってくることが多いようだ。時間割を見ると国家試験のために科目名を変えたり分けられたりして基礎知識の詰め込み教育が展開されている。遅かれ早かれ、その科目をやらなくてはならないなら、「好きだからやる」という気分的な取り組みではなく、「やらなくてはならないからやる」と捉えた方が楽かもしれない。

以前、高校時代に「生物」の授業を受けていない医学部の学生が問題視された。現在、医学部のいくつかはセンター試験で理科3科目を課すなどして著しく特質化している。もちろん理科以外の教科科目もあるので、まさに自分の夢の現実のために必要に迫られて学習する究極の「受験地獄」と化している。5教科7科目1000点満点の時代より、科目が多く、当時より問題の難易度が増している。私大の管理栄養士専攻の推薦入試では、高校での化学の受講を必要な資格条件とすることが多く、進路決定の頃になって選択していなかったことを悔やむ者もいる。選択できる以上、必須ではないが、選択者にはたとえ高校生でも(延いては中学生でも)自己決定の責任が生じているのだ。

夢は大きい方が良い、しかし、その夢を実現するために計画を立てて段階的に選択する能力を養うことの大切さや選択を左右する英語・国語・数学などの基礎科目の知識が大切に感じる。それが本当に不要であるかは、将来の自分が決定するのであって今の自分の気分が決めることではないのだ。

ここにきて、少子化の波は大きい。学校側では学生確保のため、前述の受験科目の拡大や受験科目数の減少(2科目受験)が進んで、面接と小論文とで合否を決める推薦入試枠の定員が増えた。高校生にとって夢の実現にはこれは魅力的だ。しかし、このまま進むと基礎学力は不要で、専門知識だけの偏った考えを持つ社会人が増えるのではないかと不安を感じている。❖

『東アジア共同体 麻生氏が意欲 外相会議で「主導」提唱へ』

東京新聞 12月8日朝刊 2面(11版)から

根来方子

最近の新聞記事の中から気になったものについて取り上げていきます。
少し長くなりますが、まづ原文をそのまま引用します(下線引用者)。

× × × × × × ×

麻生太郎外相は七日、日本記者クラブで講演し、「東アジア共同体」構想について「最初
は経済連携、金融、テロ対策といった個別論から入り、分野別協力を重ねていくべきだ。
日本はリーダーの一角を占めたい」と述べた。九日からクアラルンプールで開かれる東南
アジア諸国連合と日中韓の外相会議でこうした考えを示し、将来の東アジア共同体形成を
主導する意欲を明確にする。

麻生氏は共同体形成に向けた日本の役割として「日本はアジア諸国に範を示す実践的先
駆者。繁栄の基礎となる安全を経済、安保の両面で提供する国だ」と指摘。 経済、安全
保障面の安定勢力 国と国の関係に上下関係を持ち込まない の二点でも、日本は貢献で
きると主張した。

中国については「過ぎ去った事実を未来への障害としないことが重要。軍事予算や軍事
行動のあり方、社会や政治体制のあり方に透明性を求めたい」と注文を付けた。

× × × × × × ×

ここで報道されている麻生太郎氏の東アジア共同体に関する見解はかねがね知られているようにほとん
ど小泉首相の過去の発言に沿った内容であるようだ。日本の役割については氏の言うところでは「繁栄の基
礎となる安全を経済、安保の両面で提供する国だ」とのことである。

われわれが究極目的にするのは繁栄なのだろうか、安全なのだろうか。安全を繁栄の基礎とするのではな
く、繁栄の方こそ安全体制の実現もしくは維持や強化をより確固たるものにしていくための基礎ともすべき
条件として、前提条件の一つと認識するのが正しいのではないだろうか。また、その場合の繁栄、安全とい
うのはどういうことなのか考えなければならない。究極目的とすべきものは繁栄ではなく人間の安全ではな
いのだろうか。

もし実際にずっと安全であったならばかつての空気や水のようにそもそも問題として取り上げるなど何
の意味もなく、いうも愚かなことで安全を目的にすることはありえないであろう。しかし現実には大きな世
界大戦を二度も経験しその後も世界各地で戦火の絶えることなく、命を落としたり難民となったりしてい
る例は後を絶たないとすれば、今日安全を論ぜずに済みますなどということはありません。

賤の苦屋も Home, Sweet Home なども昔から誰にでも口にされている歌の言葉であり、大方の人間の望むと
ころは必ずしも繁栄ではないであろう。チルチルミチルが遠く山のあなたに理想の青い鳥を求めて絶望して
現実そのもののなかに理想の可能性を見たのはいまさら言い添えるほどのないことではないか。繁栄は万人

にとってなお究極にもとめるべく幸せよりも価値のあるものなのだろうか。

敗者の自殺者の増加に対する、貧乏人は死ねと言わんばかりの冷酷無惨な政治の現状、その根底にあるのは生物集団内の協力的共同生活とそこにある統制にみられる集団内の助け合い支えあいの現実軽視無視の考えである。

こうした自然状態を是とする発想は優勝劣敗の生態系循環に対する過度の思い入れと言わざるをえない言わば、バイアスのかかった考えだが、バイアス感を取り去ろうとすればその口実となるのは国際競争場裡での繁栄維持敗残防止というわけなのだろう。

18世紀後半から20世紀前半にかけての七つの海と五つの大陸支配を誇るような侵略的な帝国思想に類するものは明らかに終りに近づき、カントの永遠平和論的思想が第一次の国際連盟の失敗をこえて第二次大戦の惨禍の後に第二次の国際連合として勝者の連合軍側主導の下に形成されさらにEUのような方域的共同体も形成され、つづいてアジアその他の諸域でもその方向への事態の展開が胎動を始めているのである。そう考えれば半面どころか極端に一面的一方的我利我利の世界政策もしくは対外政策はこのままで済む筈がないであろう。そのような一面的一方的で依怙最負というより、我田引水の政策選択は大問題である。

究極目的にすべきものは繁栄ではなく人間の安全ではないだろうか。人間の望むのは必ずしも繁栄ではない。繁栄はたとえ万人にとってなお究極にもとめるべきものではあっても、また一攫千金はまことに望まじきことではあっても幸せよりも価値のあるもの、万人の必ず求めるものといえるのであろうか。

ついでに言い添えておけば—

この場合の「依怙」や「最負」について「依怙」の「依」はよる、よりそうことであり、また身にうけて頼むこと頼ること従うこと、また頼りにすることでもあるようで、怙も古が示すように固い心、固くなな心というべきもの、また心にそのように思うことといてよい。恃（たのむ）ことであるが、「父母を怙恃といい、依怙に対して最負という」と白川は説明するが、二つは恩と愛、恋と愛のように親子の間で逆方向的に相対する語であろう。親は子を愛しまもり育てやがて子は親を支え尊重し随い余生を支えることに通ずる。

最負（ひき、ひいき）はまた最屬最負ともなるが、また最怒とも熟するように、そしてもともと怒が人を烈しく責めることにもなるが、とにかく字義がそうであるようにその最は怒張して息を荒くして頑張るさまであり、重い荷を担っていることにもなる。無理しているさまであろうといっても通じないわけではないかも知れない。依怙最負と一語化していることについて結局親子に限らず一連一党的に閉鎖関係のうちで考えそれを中心にして万事振舞っていかうとすることと言える。「安 - 全」に対しては対極的に偏向したものと言い切ることができよう。❖

訂正とお詫び（準備 8号）

準備 8号：『安全の諸問題』 p 2, 3 1行目で『「兵は危道なり、安全の道にあらず」という。』としてしまいましたが、これは古く顔氏家訓にあるような「兵は凶にして戦は危なり。安全の道に非ず」や孫子の「兵は詭道なり」などにみられる中国の古典にある思想をふまえて安全を理解し、自分なりにまとめて「兵は危道なり、安全の道にあらず」としてしまったもので、そのような成句になっているわけではありません。引用符号と誤解をまねくような括り方をしてしまって申しわけありません。念のため申し上げます、謹んでお詫びいたします。

なお「危道」の字は史記にはありますが、前後を敵兵に囲まれた具体的な場面での危道をいっております。8号では「兵は危道なり」と書きましたが、一般的抽象的に兵をいった孫子のごんべんのついた「詭」を用いて「兵は詭道なり」といっていることをついでにお断りしておきます。

安全学進散(ホウサン)

***** 第四回 *****

辛島 司朗

この題でしばらく書きつづけようと思っている。安全探蹟(クワク)という言葉で記しているところであったが、かねてより系統的体系的整理を心がけてはいても願うばかりで、なかなか臍を固め氣勢を整えることができずに遅疑逡巡の中に日が過ぎていた。しかし村上陽一郎氏の提示している安全学成立に対する深い疑問にふれたのを機に発機発想して、敢えて安全学を成立させてゆく断片を書き留めておくことにした。この際、心覚えにすぎない文章であることを忘れぬように、敢えて自ら言い聞かせておかなければならないと思って、探蹟でも索隠でもなく迷るに任せて記したにすぎない文であることの自戒を込めて、こう題することにした。

構造計算「偽造」報道と殺人事件連続の報道に感じて

民営化の愚かしさと小学生殺害の犯罪社会化傾向に感じて

【1】 小学生女児殺害現象と「耐震強度偽計」上の建築設計問題と安全随想

——環境問題と安全問題——

いま、分譲マンションやホテルビルの震度5に耐えられぬといわれるいわゆる「耐震強度偽造」の建築物及び建築をめぐる大勢の人が生命の不安に脅え、また下校時の小学一年生の連続して発生した殺害事件に日本社会は安全問題が深刻に取り沙汰されなければならない事態となっている。が、むしろそれは氷山の一角であって「安全不安」はそれだけでない。交通手段に関するJR福知山線脱線事故は今なお記憶に新しいが、空の交通に関してもこれからは怖くて国内航空には決して乗らないことにしたという人が多い。これは国際間移動についてはとてもそうはまいらないが国内移動は高速の新幹線をもって優に代替せしめうるからである。しかし、新幹線も早期のものの経年変化が問題になる頃であり、これも、原子力発電施設からの放射性廃棄物問題をも含めて、そうとばかりは言えぬ時代に差しかかった。しかしエネルギー変遷と文明の変遷の問題についてはここで急には簡単に述べえないのでふれることをしないが、ともに石油価格上昇による民間企業の経営難や建築ラッシュに伴わない制度や人員の硬直による不良運営や不良経営によるものようである。一言でいえばすべて民営化のためにいきりたつ行政の怠慢もしくは政府の無能ぶりの証拠といえるべきである。

今まで亀井静香氏をはじめとする政治家、皮相の潮流をこえて自らの志を政治の根底に根差して育み行い変らぬ政治家諸氏が極めて強く指摘し主張してきたように、経営不安どころか経営破綻による駅前シャッター通り現象や3万人を遙かに超える自殺者についてもマスコミに繰り返し取り上げられてきているが、小泉的自己中心的ないわゆる「自己中」社会での自家中心的政治風潮のうちでは石の叫びにはならない。「自己中」と「自己中」的ポピュリズムについては回を改めて書き進めていきたいが、ポピュリズムの蔓延とニート、フリーターのなものをすべてが

この「自己中」の故といわれてしまう個人主義的な自由社会の成立したいいわゆる「戦後」の特に日本社会では55年体制成立後、もはや大した社会運動も起ることなく、これまで「環境問題」と言えば社会環境問題であるよりも自然保護運動的な、むしろ優雅ともいえる環境問題をめぐって言挙げされてきており、安全問題も身近で根底的な安全問題であるよりも、新たな科学技術をめぐる安全工学的安全を問題にするばかりであったし、また徹底的な安全追及や追求を糊塗するかのような、いや現にいわゆる「新自由主義」主張に伴う自己責任の囁き言葉の陰で進行する社会的な安全不安が、そしてまた安全に並べられて安全の蔭を薄くするような「安全・安心」もしくは「安心・安全」という「安心」の呪文的掛け声に反比例して、政治的安全問題が放棄されようとしている。

本質的に個人の内心の問題である安心に、何故かまた誰の「智慧」によるものか知れぬが、置きかえられてしまおうとしている安全誤解と、人間社会の問題として捉えようとするよりも根本的には自然問題に帰着させてしまうかのような自然科学的に偏向してしまっている環境理解が相俟って環境問題の本質を身近な安全問題としてよりも迂遠な地球環境問題にしてしまったり、直接的な安全問題ではあってもむしろ目に見え易く取組み易い身近な環境問題としてたとえばビオトープなどの要求にすりかえたりしてしまっている有様である。そして、自然保護運動と裏腹になっているリサイクル運動化してしまっているような共跛行的二本足環境問題とも称すべきものになっている今流行りの環境問題は人間の安全問題を忘れ果てたものと言わざるをえないものといつてよい。

「自己中」に対する反省は初等中等教育の世界の現場教師の間では夙に烈しく対決せざるをえなかった当のものであった。しかしそれに加えて特に私の思うところでは、御輿昇（かつ）ぎの性向が加わって、一方でリサイクル運動は差し迫った廃棄物的問題の基本をなす焼却処理と再利用再活用の原理的分別問題を蔑にし切り、部分的には資源保護精神に結びつけるとともに問題を深く掘り下げもせずただ等閑にして、大きな権威を認めるローマ・クラブの指摘をうけた資源問題に符合させて、食品添加物拒否的短サイクルの生態系的思考に矮小化して予想通りに目を覆いたくなるような不法投棄の山を築かせるに至り、他方でまた自然保護運動は安全問題であるよりは心情的で優しいペットの野良化防止の保護運動としたり、また学問的権威にもとづく生態学者のアピール、更に併さっては野生動物保護的生物種保存運動になってしまっている。いずれもそれ自体は結構なことであるが、地勢や気象問題などの大きな意味の循環や生態系循環の仕組みを忘れたセンチメンタルな感傷的運動に終わってしまっているようにしか見えない。とにかく廃棄物問題を廃棄物問題そのものとして扱うのは当節それをダサイとでも言うのか、カッコよさに欠けるのである。急いで結論的に言えば、今ハイライトの当てられている環境問題としての捉え方はつねに目新しさ物珍しさにかけ陳腐で面白みのない安全問題よりも、たとえそれが時々当然する緊急課題であるにしても、遙かに底の浅い捉え方なのであることをよくよく知らねばならない。私には今の環境問題は本当の意味でのちを見失ったものと思えないところがあると思われてしまうのである。安全を滅却しきったような一方の利益のための他方の消費による景気を煽り立てざるをえない経済も深刻に反省されなければならない。

【2】日本と一心同体的超大国の世界市場への自己中の進出もしくは侵略

—資本主義超大国の量一元的価値尺度による一元的な世界支配—

主としてバブルの弾けとともに経済独立の失敗の修正のための金融改革にはじまって激化をつづける経済「国際化」のための経済体制の改革は敗者のうちに三万人を超える自殺者がでていっているのだとしてもせいぜいのところ同情的な溜息を誘う程度、これが今の日本の世情であり人情であるといつて間違いないであろう。そして、はじめは核防止による安寧と平和のための、後には人権と民主主義のための聖戦のように言い換えられたイラクでのアメリカ軍の正規軍人の二千人をこえた戦死者はアメリカを大きく揺すぶり始めているが、ハリケーン・カトリーナのエネルギーと合していま政権をゆるがし、政策批判の波を惹き起こそうとしている。これが今のところ日米同盟で異体一心をこえて一体同心的になり、日本と同じ胞（はらから）といつて差し支えなさそうなアメリカの現状である。

日米両国とも貴族社会であるヨーロッパなどとは別であるにもかかわらず、二世、三世の職業人の出現の現実から、そしてまたいわゆる財産とか所有権からする勢力、力などの世襲的繁栄と社会原理からすれば、徹底的に貧困な people の populism への容赦のない徹底によって実質的には固定的な階級分化に発展しかねない階層分化社会の現状をみて、日本もまた利益平分をめざすともいえる戦後の福祉中心の社会をやめて、ヨーロッパに追いつき追い越せの的にアメリカに同化しきろうとするかのような敗戦前を思い出させる。それは明治維新後の学力実力主義的な階層の上下移動の容易さを伴った四民平等の精神をうけついだものの、資本主義社会的な bourgeois と prolétariat への二分に収まりかけた自由主義個人主義の時代ではあってもなお日本は領主的な君主性を帯びた天皇を残しているミニ帝国主義国家であったと言えるが、その日本の敗戦前の特徴とされた二重構造下の、大企業の掌のうちでの、中小零細企業のなお改まらぬ悲哀に重なるが、その日本での急激な金融締め付けなどによる倒産破産に見られる民生圧迫民脂搾取、細民無視の徹底傾向も無底の感がある。かえって国家財産は国民の相続財産であるよりも、「弱者資産」的資源として世界市場での自然資材や労働力搾取に次ぐ競争の勝者の競争的吸収源、資源的資産としか考えられないことになった。民営的改革スローガンの下での民間資本化は結局のところそうとしか考えられない「自己中」的即ち自国資本中心的で未熟な量力的即ち量的力の搾取的蓄積に外ならないと言ふべきであろう。量一元的富は多元多様な質的富に勝る価値をもつことはできないのである。倒錯してはならない。

【3】科学技術的試行上の「成功失敗」と学問的思考錯誤

小さな政府であっても、それはそれで結構、大切なのは政府は大きな責任を引き受け、しかも時に民生を抑圧することであっても決して心からの貪賤することのあつてはならないということである。

近代経済学といわれる経済学は人を忘れ人を無視して独歩して闊歩しようとする経済を専一に考えてゆく学と言わなければならないが、学には真理探究のためとされるものと、人間福祉を考え幸福中心の人の喜び楽しみを増幅してゆくべき理念にもとづく学とがある。民営化の問題を学に関して極言して言えば、徒労に終わるかも知れないような純粋に学的な失敗を避け、徹底的に利益追求を前提とする研究に絞り、技術化失敗の中からも「ごまかし」の中から同様に成功を求めようとすることであると言ってよい。

畑村洋太郎氏に限らず、また科学や技術上の研究に限らず、学問的研究や探求においても日常的生活上の研究においても失敗や誤謬の積重ねの上に目的への道や目的の成果への道を見出すものである。科学者の苦心談には失敗にめげることなく失敗結果の中に目から鱗の落ちるように輝く曙光を見て目的への道が拓けたとか、全く目的とは違った予想外の研究成果がえられたという話が登場することが多い。

しかし哲学的思索についても事情は少しも変らない。索(トク)ということはすべて同じと言って過言ではないであろう。思は「とつおいつ」迷い乱れることであるのはよく知られるところであるが、考も老のように巧、即ち曲りくねったもの大いに巧みを要するもので、攷となれば「うつ」「たたく」工夫も加わるというべきものである。本質的には「失敗学」なるものについて忽々のことながらここに考察を加えておくことも重要であろう。

特定目的目標に密着した成功失敗の失敗という名付けに分岐分化的で科学的色合いが深いが、哲学的苦心についても「失敗学」なるものについてと本質的には同じことが言えるであろう。

古くから食についての安全問題については醜態腐敗による実質的な化学的研究が盛んであったが、科学研究における失敗経験に際しての失敗の反省的研究は実は安全学的にみれば科学的技術的毒の研究に匹敵するものにすぎないのであると言える。アセスメントが取り沙汰され始めた初期の頃、科学的安全性評価などということが盛んに言われたことがあったが、それは油で煮付けたとか水で揚げたとかいうのに匹敵したようなありえない誤りである。安全性評価は哲学的価値づけにこそよるものであって、科学のよくするところは毒性成分の同定とか

含有量の量的評価ぐらいのことである。科学は科学である限り、個々の知識の集積とその要領のよい体系化的総合を目指すものであり、それ自体は決して本質的に総合的である安全学に代りうるものではない。総合は帰納的総合ではなく、そこから演繹しうのような原理化を必要とするものであり、原理化には価値的意味づけが欠かせないが、科学のなしうる価値付けは或る量的評価か、でなければ論理的な無矛盾の整合性につきてしまう。

すなわち科学的になしうるのは毒の有無の認識及び判定までで、安全にかなうかどうかの評価や認定行為にまで及ぼしてしまうのは浅はかな誤りである。その誤りを避けるべきであるならば、失敗学は間接的な個人的刑事責任追及をせず技術的観点からの事故調査と並んで直接的な社会的立場からの、科学をこえた根本的なものとして客観性を重んずる理論的学問的な基本的かつ包括的なものとして重要かつ大事な方法論上の科学的反省として位置づけることが必要であろう。しかし安全学のような実践へかかわる学や、形而上学や理論科学の学とは別種の学であることを忘れてはならない。

ここで当節の安全思想について付言しておきたいのは安全と安心を並列し一口に言ってしまう飛んでもないまやかしの怖ろしさである。これについては別のところで述べたことがあるが加えて言えば、安全の安心への刷替え問題とならんで安全問題の倫理問題への塗変えも、そこからは糊塗以外の何も生れず事態は深刻化の道を進むばかりであると言わざるをえない。失敗学的発想の根底にあると言ってよい概念の取違え掛違えによる誤謬の排除は、意味づけ方向づけの正しさの確立にとって極めて有効である。

そしてまた今、今後益々 on air 化してゆく journalism の本質的に身にまといつている基本的風潮は思想展開してもいたらぬその点で実体性を欠いて耳を打つ空ろな聲の風となり終わりかねない。風聞には G. W. オルポート流の学者によってよく研究されていた警告に耳を貸すまでもなく、個々人の体験に徴しても、十分な警戒が必要であることは明らかであろう。せめて時代をこえ風をつなぎとめる文字によってもなおこの目で確かめる努力を欠いては事実を離れてあらぬものになり果ててしまう恐れは消えない。

ここで単なる個人的住宅であることをこえて、「集合住宅」に関連させながら集団や共同体を考慮に入れて一つだけ具体的問題提示をしておこう。建築物についてもそれは単に「物」についてのことではなく日本国の建築そのもののあり方が不安を惹き起こすのであるが、そのような日本社会のあり方こそが実は不安の根源なのである。その際の問題は確かに社会倫理の問題であるともいえるが、それは個人的な心と生活態度にかかわる道徳の問題となつてゆくのに対し、他方では政治の問題となることが忘れられがちである。そしてそれはまた一方で経済システム、他方では法システムの問題となることは言うまでもない。

社会存在としての人間、逆に言えばその人間の形成する人間社会は単に個人道徳の、ひいては個々の個人存在に帰することのできない烏合の集団、群衆の集団或いは逆に羊群集団の集合体を形成して終わるものでもない。牧羊と牧羊犬とその背後の牧人との呉越同舟的階段的集団的構造分析で事足りるようなものではないのである。ここで示唆深いのは古い朝鮮とか韓国とか、それ風の、そして当然また中国風に改めた郡制以前の日本古代での「評制」である。評は字から言っても音から言っても郡とは別である。是非該当領域に明るい学者の研究に期待したい。今言えることは、郡は群と評の中間であり、また評と國との中間的或いは両面的存在が人間の社会的存在であることである。

そして理念的に言えば、それこそが祭政一致的社会というべきであるが、そうだとすれば、政治の「政」の右側の「女」の意味の理解と現代社会、取り分けて文化的になってきている国内政治に反して平和的文治政治理念も未だしの野蛮さを多々残す国際社会の現状をどう理解し、どういう方向性を根本に据えるべきか。それは当然、無分別に human - nature とのみ呼ばれ続けてきた人間性人性の社会的角度からの徹底考察を伴う筈のものであるが、現在あるもっとも大きな安全問題は正しくここにあると言って差し支えないであろう。今、工学倫理とか技術者倫理とか生命倫理とか環境倫理とかが盛んである。いづれはまことに科学的であると言わなければならないことになる

が、根本的にいえば、哲学的に「倫理」そのものの考察を深めながら、人性論、存在論的根底へと問いすすめる哲学的姿勢の欠如こそ問題であろう。

市場主義、経済中心主義、個人主義、民主主義等の最大の欠陥は全的で根本的根底的考察と、従って安全軽視にこそあると言ってよい。

私なりに非常に片寄ったものであるが参考までに記しておけば、私は今のところ昔読んですっかり内容を忘れてしまった次の三者の三著からえた問題提起に従って私なりに考察を進めてゆくべきかと思っている。

- ウーリッヒ・ベック, 「危険社会」, 1988年(東廉監訳) 1998年(東廉、伊藤美登里訳)
- ユルゲン・ハーバーマス, 「公共性の構造転換」, 1973年(細谷貞雄訳) 1994年(細谷貞雄、山田正行訳)
- ロベルト・ユンク, 「原子力帝国」, 1979年(山口祐弘訳)

【4】倫理と心的道徳と実践哲学的存在の安全

西部邁氏は英国からの帰国後、「倫理経済学序説」を挿頭の花(かざし)として颯爽と現われた時には大いに感銘をうけたが、その後ヨーロッパ近代の価値観にもとづく国家観をこえられない政治姿勢に、新時代の旗手たりえないとの歯痒さを感じて大変失望したのであるが、佐藤光氏などのほか特に佐伯啓思氏などの後進を育てた学者としての功績の底にある基本の姿勢は大いに高く評価したい。ただ氏の挿頭の花には翳(かざし)の翳(かざし)としての古義が強く生き残って、それを手に政治理解の不足を来たす蔽いとなり隠しとなってしまったように思われるのが残念だ。時代遅れの国際政治家や学者のオンパレード、オン・エアーを見れば、その parade は私には戦争準備が少なくとも肯定のあるべからざるような将来像がつきまとう。

II 安全問題と環境問題や内政外交の政治問題及び民主主義の問題

冒頭に掲げた二つの問題は古くからセット化していわれる生命、身体、財産に明確に直接かかわることである。しかしこれらの問題は狭い一々の限定を離れて広大な全的世界的関連のうちに生命存在者の存在を位置づけて考えれば、個別具体の迷路に入り込んでしきりに生態系を口にしながらも全的綜体を忘れ、われわれ人間にとってそれが最優先的主体的生命存在者であるべき人間存在の否定にさえ及んでしまう「環境問題」の陥り勝ちな誤りをこえて、それをも含めた安全問題こそ真に根本的であることを、明白に庶民大衆に突きつけてくる。われわれ自らの生活を中心としながら生命や生活について考える人間にとって、人間的生命とその生活こそが決してすべてというのではないが、すべての問題の中心に据えられるべきことはいうまでもない。

そうでなければ、そもそも主体存在の「安全」的把握なしの「環境」という理解は従ってまた環境問題という問題性は成立しえないのである。当然問題とすべき安全は「宇宙の安全」でも「地球の安全」でも「環境の安全」のことでもなく、たとえ黙って安全問題といってもそれが人間にとっての安全問題であることはいうまでもない。人間中心思考がこれまでの歴史の誤りであるとよくいわれるが、人間中心的捉え方の誤りに過ぎないものを人間中心の姿勢そのものの誤りと飛躍してしまうのは決定的な誤りといわなければならない。それは科学的な地動説が人間の日常的現実生活の場では、しばしば誤りとなることに通ずる。そしてまたそれは日の出日の入や満干潮時刻などグリニッジ時刻をそのまま各地に通用させることのできないことに通ずる。標準時は普通時でもなければ統一時などというものでもない。同調や調整のため換算の際に尺度の標準元を定めるのみのものである。言ってみればそれは現実否定の形而上学のもつ理想性を観念的空想性と直ちに同一視してしまう誤りにも通ずる。観念性というのは現実存在問題を処理するためのイデア的存在論の究極もしくは集大成なのであって、観念的であるということが誤りの代表とされるが、世界はすべてただ「一心の作為」とまではいわずとも唯物論的存在思考の長い迷妄の

それはもはやはっきり超克されなければならない。純粹理性による理想は現実世界の中で実践的な現実的批判の下に理念として打ち立てられなければならない。イデア的存在者の存在性は re-al な現実世界の中に場をもち所をうる存在とは違った存在性をもつ概念的観念的存在なのである。

私は 1994 年に世界書院から「環境倫理の現在」として私の意見を世に問うて以来‘環境主’とか‘環境主体’の語を用いて環境問題とその本質的根底としての環境概念をずっと説明してきているつもりであるが、現実的に環境を問題とすることは主体あつての環境の「環境」としての成立をすでに前提としているのであり、主体-客体の諸関係を具体的現実的に捉えるように、主体は現実の諸‘方域’環境との相関のうちにあつて単なる主客相関の主であることをこえて環境に対する環境主となって実践社会のなかでの実存的行為主体となる。言い換えれば範疇表内諸段階における諸形態のままの諸実体の主体としての諸存在性をも捉えて全ての問題は捉えうるものとなるのだといわなければならない。

抽象的普遍的問題把握、換言すれば論理的ともいうべき概念論においても同じことで、範疇関係の把握つまり範疇表の形成とそのうちでの位置づけこそ完全に迫る主題概念の理解となるのであつて、この段階に至っては一々の主題概念の理解は to hen kai pān 即ち‘一即多’的理解となるといえる。そして諸存在の世界の違いは、中心の置き方、中心核の違いによるのである。この概念論における完全性が実践的実際の現実世界においては安全性の問題となり、そこに安全問題にも「安全学」が不可欠のものであることを知りうるのだということを肝に銘じるべきであると思われるのである。

ここでは殺人事件のような目に見えるような兇悪な刑事事件に詳しく立ち入ることは今は舍くが、われわれはこの機を失ってこれ以上取り返しのできない困難な事態に安全問題を陥らせてはならない。まづ多くの人が蹶起(ケツ)して輿論を喚起し、力を併せて安全の声を高めていかななくてはならない。今日の人は科学化のベールを帽(かぶ)り時には縫包(ぬいぐるみ)を蒙(かぶ)ってしまい全身を覆われて今日の安全問題は難問に化してしまった。しかし、その科学化のベールを払って、一方で理論的眞理性を棄ててもなお科学に残された現実的権威は科学技術化した科学的成果によるもので問題の実は紛れもない技術問題であることを正しく理解し、眞の探求における科学に対する信頼を盲いた心の迷信として狂い邪信迷信にしてしまつてはならない。安全生活のためには、根幹にある日常的な人の生活、人間の生活社会に正しく立脚しながら科学的知識を安全工学の中に移しとり、刑事的司法処理技術とは別にしながらそれをも包含させ、具体的政治的処理技術を含めて、誰にでも思案考察の機会を与える古来の安全問題をストレートな政治問題として取り上げ直し、これを機に今こそ「安全」問題を改めて新たに考え、それを一時的な氣勢に終わらせてしまうことなく、「安全」とは何かを根本的に問い直してゆく大きな「切っ掛け」とすべきときではないか。もう古くなりかけはしたが、なお、今なお新しい人間工学、未来工学などに倣つて大胆に言えば、政治というのは自然科学及び自然科学技術的工学や社会科学に基づく社会工学を含めた最高水準の工学的技術に外ならないといえるであろう。

いま世界的に政治は内政のみでなく外交も含めて諸イデオロギー批判を含めた大きな反省を迫られている状態にあるが、特に日本に於いてはアジアの諸外国の声に対して「内政干渉」と言う「攘夷」的発想の不可解な独尊的発想が強まっている。ここでは主権侵害と内政干渉の語を比較検討し、その意味を明らかにすることは暫く措くことにするが、とにかくこのいま、いわゆる「経済」に呪縛されて、眞の経済を忘れ、政治の重大な意義を見失つて政治家が影を薄めて、政治屋と悪罵される状況を正しく見据えなければならない。

政治は「正」しきをもとめる意志の表われであり、そのために「女(ボク)」の旁にも表わされるように権力行使してまで治績をあげなければならないのであり、そのための手段的組織としてテクノクラートとしての官僚達を抱えているのである。その権能はかつての君王、皇帝に匹敵するもので、実質的には「民主」的と誤つて称されたりもする、「共和」的最高責任を負う機関こそ政府なのであり、官は国家統治意志の具体的執行を行う行為機関であるに過ぎないと言えれば極論になりかねないが、ここでは「政」の右の「女」と西戎などという時の戎とは大違いで

あって、少くとも西戎という時の戎の字の中に表われる「弋」をもってする司法組織や軍組織の官以外の官は「支」をもって教え導くのであると知るべきである。とにかくそのような本質的にもかかわらず、日本の現政府は批判力を欠いて或いは批判者を圧殺するかのようにしてアメリカを模倣し責めをひたすら、「官僚」の組織ないしそもそのその存在そのものに帰して「小さな政府」と称して、サービスの行政府を小さくし、民間の求利組織と民営化しかねない軍事組織に力を入れてその自由を奔放にし奔逸せしめようとしているのではないか。恰も政治家は裸で民に接し、民間に政権の座を設定しようとしているかに見える。

ここでは政治、統治の「治」とは何なのかをも問わなければならないが、何より治は水をおさめることであり、気とともに生を養う根本のものであって不可欠のものでありながら、水は乱れては禍災をもたらしかねない野放しにはできないもので、気などとは全く別に外から人為的制御すべきものであって、水を制するものは天下を制するともいわれていてそこに文化の根源も文明の端緒もあるといえる。今日風に言えば制御こそがそのキーワードであるが、忘れてならないのは何故政治が経済とは別概念のものになったかである。即答を敢えてすれば、経済はeco-nomyなのであるが、それが交換経済の中で物質支配の謂となり延いては物質的支配のことにもなって、根本的に重要な意味での家の統制、制御性を失ったからである。

統治は賢者の権を必要とするようになったのであるが、民主主義もしくは民主政府でいう「民」という主権者及び民の「共和」とは何かが改めて問われなければならないであろう。しかしそれはさて置いていけば、同じく父(ホ)を旁とする扁が政のように正ばかりではない。教の字の場合には扁は孝の字となるのであるが、孝は老の字の下部の匕を取った老の略字に匕の替りの子を入れたものである。正邪是非善悪を十分に知りえない子などを訓育する「教えること」の基本は、直截に裁き終らせてしまうのではなく時間をかけて導き教えることなのだといえよう。またどんな人間でも三人寄れば文殊の智慧がでてくるのであろうか。

統治ではなく教育の語をつくるのであるが、民に対しても教育や指導が政治的統治の反面において必要なのはいうまでもない。そうすれば、共和と民主とは同時に成立つかどうかも当然問題にせざるをえないが、私には民主は民本の誤りであると思うが、そこかしこで何度もいっているところであるのでここでは繰り返さない。しかし、ここで「内政干渉」の語の意味するもの、外交の意味するものは何かに少しは答える努力をしておかなければならないであろう。

ここに先づ明らかなのは政治にも内外の別があるが、交渉、交接などの交際によってその別が生ずる。問題はその分際であるが、それを絶対化し細分しておのおのの独立を果すべきなのか、際は取り除き取り去って、際の必要もしくは存在を取り除くのか。境界や限界の「界」をはらって金銭的な量的上下を直ちに高下とすることを除けば、身分的分際をはらっては四民同等的平等を明確にして、統治-非統治の関係を鮮明にするべきなのか、それが問題になるのではあるまいか。それとも両極端は排除され、中道中庸こそ人の道、人間の行(みち)であり、確かなところ少くともいままでその行は関(みち、コウ、ゴウ)ともなり迪(みち)ともなってきたということを重視しなければならぬのであろうか。

確かに関(ゴウ)は一方的傲慢や豪にもなり、號ともなるが、他方で号ともなり闇にも通じ三闇をうることにもなるのである。人の行いは敵を生みもし、迪をうることもできる。上には下があり、下には上があるように、左右もあり高下もある。内政があれば外交もあるわけであるが、外交は内政のあるところにこそありうる。内政のない外交は屈服、隷属であり外交のない内政は暴政であり、孤立を嫌えば、永遠の抗争、戦争を将来する外ない。

安全問題に戻ることにするが、safe や secure などの語にとって代られることなく、またその訳語として用いられて振(もじ)りまでに変質させられることなくこの言葉を使いつづけて、たとえその意味を薄れさせられたりかなり捻じ曲げられたりしながらも、中国伝来の「安-全」という安全の基本を取り落とすことなくどうか使いつづけたこの日本にこそ、新時代の理念的原理として世をかえてゆく正しい契機が秘められていると考えられるの

である。

これは安全問題を庶民大衆の手から取り上げて高度技術絡みの難解な問題としてそれぞれに特化してしまっている専門家の手に委ねてしまうのではなく、安全は日常茶飯事に類する人間ないし生命存在者の生活の基本問題として、個々人の主体的自存の問題であり、自存力の問題であることを明確な認識をもって強烈に意識させる問題として捉えさせるものと考えべきである。

しかし、現代の高度文化、文明下の社会に於ける安全問題が言程然様（ことほどさよう）に簡単容易な事柄ならば、人は容易に安心していられもしよう。しかしいい加減の「安心」ならば話はまた別であるが、心底からの安心はそう簡単なものではない。「確実な」安全を見通すのではなく、「確実に」安全を見込み確信してのみ可能な「いのち」掛けのことである。ただし日常的には「心掛け」の問題ということができるが、「安全」の心掛けをも失っては真に安心できる筈がない。親などの保護者にしっかり護られた幼児的安心はそれほど難しいことではない。しかし、生活を自ら支え自己責任に於いて営むものにとっては憤懣（むづかり）の果てに放心し投げ出して仕舞っても、保護の他力によって泣き寝入りの安心も可能であるといえよう。しかし save の問題であってみれば、安心などは無縁といてよいが、save や salvation の目指すのは安全結果であり、志すのは security であって、自らは安心していられないどころか、自らの安全は場合によっては犠牲にされなければならない。security は委ね任すものの sans souci (サンスーシー) を目指すが secure するものの sans souci (=無憂) を志すことはむしろありえないのだと言ってよいだろう。他力に縋（すが）り切らなければならないほど難しいことはない。安心しきっては「安全」はそもそも可能ではない。いわゆる安全は safe のことになってしまい勝ちであるが、safe ならばほっとする安堵の安心をうることができる。

いわゆる民主主義の政治がここで考え直されなければならない。民主主義の致命的とも言える最大の欠点は衆愚政治と紙一重というその一点、しかし致命的一点にあると言って過言ではない。「安心」の秘訣は些か逆説ながら、「安心」し切ろうとしないところにある。そして言い換えればその要訣は常時「安全」の心掛けを忘れ失うことのないようにするところにあるのである。

今日できるだけ広く安全理念を弘めたいと考えている私のもっとも気になってならないのは実は「安心させること」に外ならない se-cure が sans souci のことのためのことに外ならず、また safe はそのための状態の出現または継続のことに外ならないにも拘らず、これを安全保障とか安全確保としてしまっていることである。安全を保障することと安心させることとは違いますが、安全保障を他人に頼んだからといって安心しきることはできないのである。安心しきろうと思えば、安全などを忘れてしまって大船に乗るか、大船に乗るような酔い心地になることである。安全は一般に safe という結果に必ず、また直接的に結びつくものと考えられているが、真実は何よりもまづ常になくなることのない不安の中の常に欠かせない努力のことである。努力をこそ、しかも厳密には自らの努力をいう「安-全」と結果状態である safe や sans souci 状態を将来する secure は違うというも愚かで全く異なるものだと言いたくなるほど程遠いものであることを知らなくてはならない。

安全そのものを真正面から論ずるための根本的な典拠を挙げるのは、適材をえてその教えを乞う形でまとめていきたく、機会を改めて扱いたいと思っているので暫くご猶予いただきたいが、「安全」に深くかかわるものとして、これについてもここでは十分に論じられないが、とにかく敢えて言い添えておけば、自ら直接に安全努力を尽すことなく、しかもそれにも拘らずなおかつ安全努力をなすものとみなしうるのは国民と国家との不即不離の関係にある「国民の国家」の安全に対する奉仕献身のみられる場合である。したがって、蛇足的説明を加えれば、国家が国民を奴隷とする君主のものであるとか、他国民からなる他国に従属する関係であるとか、階級的対立を含む国家であるか、国民間の優勝劣敗的な競争を必然とする国家ならぬ国家の場合は、間接的な安全努力が自己の安全努力となる筈がない。ここには国民福祉とか幸福原理などということが国家の結合原理の中から除外されてしまっている

からであるといつてよい。

「民主主義」の許しがたい誤りは democracy についての「民主」というその誤訳にこそあるといわなければならない。政治は常に有徳なもの、有能なもの手に委ねられるべきものであることに疑いを挟（さしはさ）む、いや誤解ないように言い直せば、差し込むことの出来ないこと、心あるものにとって疑いない筈である。

挟の字の意味するところは外から中に差し込むことではなく、両脇に抱えること抱え込むことであって、同じく「夾」から成るが峽(=峽)や狭と挾を決して混同してはならないであろう。疑念、疑惑は常に内に本質的に伴うものであるということ、しかし、それは安全学の根本的方法に関わるものである。決して外から加わって否定に連りうること、繋げて止むことのできないものであることを意味することを正しく理解しなくてはならない。

さて、民主と訳される語の中の *dēmos* は民衆ではなく、民の居住区によるむしろ住民の住地区のことというべきものである。即ち共同体それも地域共同体的であることこそその真義であり、住民はたとえ住地をかえてもなおかつその元の共同体の成員であることであり、そこに政治統治の権原があり、従って個人的権限もその同族的古くは共同体的 *commune* のうちに止まるのだということではなければならない、また裏返しに言えば、政治統治が必ずしもすべての一々の庶民の手に帰するというにはならないということである。庶民に最低限可能なものは然るべき形で輿論の形成者の一員となり、指導者を誤りなく択び、これを支えることにあるのだと断言しなければならないことを *demos* の *cratia* (=cracy) ということの真義としなければならないであろう。附言すれば、衆愚政治はいわゆる市民もしくは国民の形式的な主権を拡張拡大し、実質的な能力の点を無視してしまったことにその端緒をみることができる。そして、その衆愚性を正当化しうる根拠を見出しうるものとすれば、それは国家内における階級的対立の中での *dog fight* 的主権争いの肯定に見出す以外にないであろうと思われる。

なお白川は『字通』p. 329の「愜」の項においてその基本義を「可なり」「快なり」とし、「愜然」の熟語を取り上げ、満足することと説き、魏の嵇康の「養生論を難ずるに答う」をひいて「意（こころ）足る者は、●（巡のシンニョウを田に替えた字）畝（けんぼ）に耦耕し、褐（かつ）を被（き）菽（まめ）を啜（すす）ると雖も、豈に自得せざらんや。足らずとする者は、養ふに天下を以ってし、委するに萬物を以ってすと雖も、猶ほ未だ愜然たらず」の句を挙げる。「安全」問題にとって欠かすことができず、「安全」のうちに「安心」を見出すための肝要は「安分」にあることを示すものとする私達の解釈に通ずるものであろう。問題は「安分」に当って何を残すべき基本とし、時と場合によって何を捨て捨くことと明らか諦めなければならないかである。

ひたすら進歩や増進を要（もと）め、効率能率に目が眩んで、そのための改革を改良そのものと錯覚してしまい、客観世界の盤面における錯角に取り違えてしまったりするのは片局の政治であり偏曲の政治家、いや政治屋といわなければならない。教育をみるがよい。家内の平和平安をみるがよい。まして天下全体、世界のすべては一朝にしてなるものではない。能率効率至上は技術的にみても飛んでもなく跳んでもない誤りであり、生活全般からみれば到底ありえない妄想乱心のことと言わなければならない。「安-全」の道こそ政治、経済、教育や社会の制度の根幹であるとすれば、繁栄は望外のもしくは意外の倖せとでもすべく、幸福よりも福祉とそのための平和と平安をこそ政治の要諦とし、政治の過程は常に「安全」のための方策とその改善にあるのだと考えなければならないであろう。「安全」を考えながらただ今この文章を一旦終えるに当ってつねづね思うこと深く憂えることをここに言い添えておけば、哲学排撃の今日、新聞の社会面をはじめ政治面経済面などをにぎわす安全問題は多くあって枚挙に遑がないにも拘らず、学芸欄にも「安全」そのものを問題として扱う根本的姿勢や論文が殆ど見えないことである。

能率効率進歩向上万能の浅薄な姿勢をすて、文明への打込みをやめ、自然に根付いた文化に身を任せるべく、安全理念を追究し追求すべく総合総括のための一般的な哲学的勸学、特に安全学の勸進に力をこめてつとめなければならないと思う。

安全シリーズ 事故災害におけるサバイバビリティ向上の研究について

寺田 博之

安全に関わる課題の取り組みについて欧米と我が国の熱意や力の入れように関して大きな差異を感じるものの一つに事故の際の「生存率向上」の研究がある。

我が国においても発生頻度の高い自動車事故における研究に関しては衝撃吸収構造やエアバッグの効果についての研究・実験などは行われているものの、大規模な列車や航空機の事故、原発事故、大震災などに対しては、予防的研究はあるものの、一旦発生した事故・災害における生存率向上の研究はまだみだである。

我が国では、「事故は起こしてはならないもの」であり、「原因は何処にあり、誰が悪いのか」の犯人捜しのように主眼が置かれこれに終始し、処罰あるいは引責辞任の形を取って一件落着となる。このような状況であるから飛行機の墜落事故の際には、「落ちて壊れない飛行機の開発」、「落ちる前に全員がカタパルトで脱出できるようにすべき」など途方もなく非現実で唐突な議論がまことしやかに行われる具合である。(遠い将来においてできるかもしれないことまで否定するものではないが) 尤も、昨今福知山線の事故を契機に、車内の手すりの数、手すりをカバーするための材料に要求される特性、吊り革の位置と数量の適正化などについても議論され始めたことは、事故における生存率向上要因の検討の必要性を主張する立場からも好ましい方向である。

これに対して欧米では、航空機の場合を例にとると、発生頻度は 100 万回に 1 回でも致死事故は必ず起きるものであることを直視し、それが生存可能な事故であった場合には、一人でも多く「三途の川」を渡らせないためには、構造・環境整備等はどうあるべきかについての議論・検討が活発に行なわれその結果に基づく提言が行われている。

生存可能な事故の意味について、過去日本において発生した航空機事故を例にとって説明する。

航空機事故の特徴としては、全く死傷者がいない場合と不幸にしてほとんど全員が致命傷により亡くなる場合とに偏った分布となる。日航機事故、中華航空機事故、墜石事故などが後者に当たるがこれらは何れも「機内に生存可能な空間を保つことができなかった」という点で生存可能な事故とはみなされない。一方、1982年2月9日に日本航空の精神を病んでいたパイロットが着陸進入中に上空でDC-8のグランドスポイラー(翼面上の空気の流れを阻害する一種のブレーキ)を作動させたために羽田滑走路手前の浅瀬に突っ込んだ事故があったが、その事例では事故発生時には機内に十分生存可能な空間が存在していたことにより生存可能であった事故と位置付けることができる。この事故では24人が亡くなりその他150人が重軽傷を負った。事故

<次頁へつづ>

では機体の接水時に後部機体が前方機体に覆いかぶさるような形でめり込み客室前部の床の主柱(キールという)が衝撃圧縮により挫屈破壊したためこの部分に死者が集中した。

一般に、不時着・オーバーラン・胴体着陸などの十分生存可能と思われる事故で生存率を向上させ得る要因を拾い上げてみると以下のようなことが指摘されよう。

- ・ 機体の主桁、シート等の耐衝撃強度をもう少し上げる。
- ・ (このようなケースに頻発する)エンジン火災などに備えて機内にスプリンクラーを設置する。
- ・ 漏れ出しても引火し難いジェット燃料を開発する。
- ・ 客室の耐火性を向上させる。
- ・ 乗客誘導などサービス向上のために客室乗務員を増やす。
- ・ 客室乗務員の訓練教育のレベルを上げる。
- ・ シートの向きを反対にする(シートベルトで内臓損傷の例あり)。

等が考えられる。

欧米では過去の事故について、「若し以上のような改善がそれぞれ施されていたならばどれだけの人が生存可能であったか」についてケーススタディに基づいたシミュレーションを行い、航空安全の専門家達の科学的確率論、推計理論に基づいた検討が盛んに進められ、費用対効果比も考えたうえで、関係する政府機関へ生存率向上のための提言が行われている。

我が国においてもサバイバビリティ向上を図るために取り組むべき課題が多々ある。例えば、

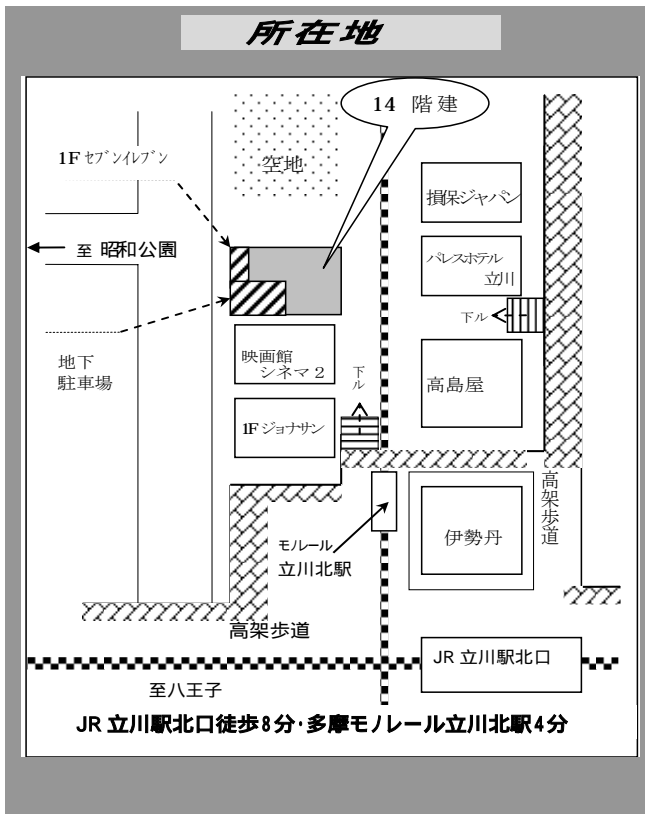
- 大事故や大規模自然災害に素早く適切に対処するために、地方自治体・警察庁・消防庁・海上保安庁・国土交通省および防衛庁など関係する省庁の一元化された指揮命令体制のあり方、についての合意形成と実施体制の整備、

また、航空機・船舶・鉄道などの輸送機関の事故では、

- 日本が得意とする材料開発の立場から、軽量・難燃性・燃焼時の低毒性な内装材の研究開発、
- (英語の解らない日本人観光客に人的被害が集中した)等と言う悲劇が起こらないよう、緊急事態に対するジェスチャーランゲージに関する国際的に共通な方式の開発促進(航空機の場合)等がある。

勿論、原子力プラントの大事故、航空機の墜落などあってはならずまた、あって欲しくない事故であるが、最悪の事態から目をそむけタブー視することなく生存率向上のための方策を十分に練っておくことも大切な備えであり、真のリスクマネージメントの一つであると言えよう。

所在地



ご助力ご参加のお願い

本格的な活動開始をまえに目下のところ、会費問題を含めて体制整備など検討中です。

今後、本の出版など事業活動を展開して収入を補い、会員の過大な負担を避けながら活動してゆきたいと考えておりますが、本格的な事業活動にいたる前に「あかり」即ち実践部門への着手も考えています。御智恵などを含めてご助力下さるようお願い致します。

安全問題関係の書籍、古い雑誌など、おもちで不用のものがございましたら、ご寄附お願い致します。特に帯木蓬生氏の本などを収集予定です。その他有益な本、論文など情報をお寄せ下されば幸いです。この会報の編集や校正、ホームページ更新など特に立川市に近い方でお手伝いいただけませんか。ご協力のほどよろしくお願い致します。

今後会員数の増加とそれに見合う理事会の本格的拡大編成の後、今後の決定を待ちたいと思います。志ある方はこの際会員としてご参加下さることを心からお待ちしております。

■ 勉強会のおしらせ（毎週日曜日 10 時～、於：事務所）

年が明けたら、女系天皇問題と今なお変らぬ万世一系の日本統一原理との関係をもめぐって、テーマとして『源氏と日本国王』（岡野友彦著：講談社現代新書）の批判的検討をしたいと思っています。その際また併せて第 38 回歴博フォーラム「古代日本 文字のある風景」にもとづいて編集された『古代日本 文字の来た道』（平川南編：大修館書店）なども参照しながら進めてゆきたいと思っています。関心のある方はぜひご参加下さるよう事前にご連絡下さい。

***** 編集後記 *****

- ◆ 発行が 1 ヶ月近く遅れてしまい、たいへん申し訳ございません。
- ◆ 芹沢氏には準備 4 号の「学校の安全を考える」に続き、2 度目のご寄稿を頂きました。凶悪な事件が次々と発生し、殺伐とした社会になりつつある今日、学校教育について受験中心を反省しながら、人間教育の重要性を見直すことが強調されていますが、具体的には進路を決定する際だけでなく人生に必要な教養を身につけ生涯学習を続けていくためにも、基礎学力をつけることが大変重要であると感じます。
- ◆ 今回ミニ辞典は「新聞から」の後尾に付属する形でつけてしまいました。今後は分けながらとにかく別々のものとして続けていきたいと思っております。
- ◆ 現在、創刊号に向けて体制を整えつつあるところです。会の活動や会報についても、ぜひ皆様のご意見・ご要望をお寄せください。

